

2025年度 第2回教育課程編成委員会 議事録

日時 : 2026年1月23日(金) 14:00~15:30
場所 : 愛仁会看護助産専門学校 2階会議室
委員(敬称略): 公益社団法人大阪府看護協会 会長 弘川 摩子
Office Kyo-shien 代表 池西 静江
社会医療法人愛仁会 カーム尼崎健診プラザ 所長 松森 良信
社会医療法人愛仁会 愛仁会本部 看護部門特任理事 増山 路子
愛仁会看護助産専門学校 学校長 本山 覚(欠席)
愛仁会看護助産専門学校 副学校長 藤尾 泰子
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 教育主事 小林 理絵、清水 弘子
愛仁会看護助産専門学校 助産学科 教育主事 大石 有香
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 学科調整者 長澤 亜由美
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 学科調整者 西山 玲子
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 実習調整者 大西 恵梨
愛仁会看護助産専門学校 看護学科 専任教員 佐野 和美
愛仁会看護助産専門学校 事務部長 木田 尚樹(欠席)
愛仁会看護助産専門学校 事務部 川口 璃子(書記)

議事次第

1. 副学校長挨拶

2. 第2回テーマ「カリキュラム評価結果から見た当校の課題の明確化」

- ①小林教育主事より「カリキュラム評価結果から見た当校の課題の明確化」の報告がなされた。
- ②佐野教員より「他職種連携教育(IPE)演習の効果と改善策」の報告がなされた。

3. 意見交換

(委員) 基礎学力と技術力の内容はディプロマポリシーのどの部分に狙いを定めているのか。

(学校) ディプロマポリシー2番「倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護実践能力」の部分で、知識がないと科学的根拠に基づけない、その場・その時・その状況に応じた判断ができないという部分を踏まえて重視している。

(委員) 通常、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの一連に対して評価をしていくと思うが、今回ディプロマポリシーのみ提示されたのは何か意図があるのか。

(学校) カリキュラムの目的・目標に関しては共通認識ができていて、卒業時に到達する能力の具体的な内容を改めて共通認識するため。

(委員) 教育課程を評価する際に、ディプロマポリシーの中から三年間で重視すべきものを選択することが重要である。

(学校) 入学者状況を入学時に評価し、本校の教育内容と照らし合わせ3年間問題なく学習できるか等を分析しないといけない。

(委員) 学生に対してディプロマポリシーをどこまで求めるかによっては、教員側が疲弊することになる。基礎学力が異なる学生が入学してくるので、入学時背景を共通理解することが大切である。

その対策として、成績に応じたクラス分けを実施している学校もある。大学でも、教員担当制を導入したり工夫されているが厳しい現状がある。専門学校ならではの入学時背景を把握するなどの個別対応ができるという強みを活かしてほしい。

(学校) 新カリキュラムで卒業した法人内就職1年目の新卒者が、退職・休職となったり、新人ラダーの到達が難しく配置変更を行っている現状がある。卒業生の状況を聞くと、人間力・社会人基礎力の育成が不十分であると考えられるため、看護基礎教育の段階での教育内容・教育方法をどのようにすべきなのかについて検討が必要である。また、今後入学時点での学生の状況（規律を守ることができるか）などの把握も行ってほしい。

(委員) 新人の離職率が上がっており、特に法人内の卒業生の早期離職者が多く、カリキュラム変更の影響があるのかを母校訪問のアンケートにて分析してほしい。また、目指す卒業生像の共通認識を行い、OSCEや実習の導入方法の再検討が必要である。

(学校) 技術力の向上が年々課題となっている。学生の思考の部分に注力して教育しているが、それを実践に移す部分が非常に弱いと感じる。看護技術の演習もたくさん行っているのに、それを活かして3年間で能力を高めていけるようなカリキュラム構築が必要である。

(学校) 教員側が学生の「気づき」を引き出す仕掛け作りをすることによって、主体的な学習意欲が高まり、学生の力を伸ばすことができていると感じている。

(委員) 看護に必要な基礎学力と技術力に的を絞って学ばせるべきである。また、技術試験は何度も受けさせ、学校として基準に満たない学生は不合格として選別する必要がある。

(委員) 専門学校の強みを明確化にしないと、法人内よりも外部就職の方が優位となってくる。

(委員) 実習場所を最大限活用してもらい、働く際にどのような視点が必要なのかや今後の実習に何が必要になってくるかを教え、辞めずに働き続けることができるような学生を育成してほしい。

(委員) 一般企業では、就職2年目の3分の2が辞めるのが一般的になってきているが、その70%が退職後に後悔しているとのデータがある。中には、手厚すぎる環境に置かれると今後のキャリアに不安を感じて辞める人もいる。どのように能力を引き出して成長させてあげると辞めずに済むかを考えないといけない。

(委員) 看護教育は最低限の項目に絞り、まずは国家試験合格を目指して3年間学んでもらい、卒後3年間でラダーに沿ってスキルを高めて育ててもらえば良い。

(委員) 近年の学生はほとんどがChatGPTを活用するなど、勉強方法が変わってきている。講義でTBL(チーム学習型授業法)を行うと、本来学生は知識を活用して考える力をつけられないといけないのに、覚えたり考えたりすることをしなくなっている。今後、AIの使用方法を規制したり条件づける必要がある。せっかく教員が学生にとって面白いと感じるような授業を準備しても、学習につながらないのは悔しい。

(委員) 学生にとって苦しい部分は自身で乗り越えてもらい、成功体験を経験させてほしい。病院の教育担当にも指導してもらってはどうか。

(委員) 法人内の病院に教育科・教育科長を設置して教育体制を整備しているので、学生支援の強化につなげていけたら良い。

(学校) 今年の助産学科の学生を見ると、大学卒の学生よりも専門学校卒の学生の方が実習での判断や対応などの実践能力が優れていると感じる。やはり、実習時間の経験数が大学よりも圧倒的に多いので、専門学校の強みになっていると思う。

以上